



Data 2022-69

監督: ロマン・ポランスキー
脚本: ロマン・ポランスキー/ロバート・ハリス
原作: ロバート・ハリス
出演: ジャン・デュジャルダン/ルイ・ガレル/エマニュエル・セニエ/グレゴリー・ガドゥボワ/エルヴェ・ピエール/ウラディミール・ヨルダノフ/ディディエ・サンドル/メルヴィル・プポー/マチュー・アマルリック

👁️👁️ みどころ

ドレフュス事件は、名前は知っている、まさに「あなたが知らない」世紀のスキャンダル。本作は、「文書改竄 証拠捏造 メディア操作 巨大権力と闘った男の命がけの逆転劇」だが、なぜ巨匠ロマン・ポランスキーが今、そんな映画を？

原題の『J' accuse』(私は告発する!)は、1898年1月13日付オーロル紙の一面を飾った、エミール・ゾラの公開告発状の言葉。したがって、本作の本質をズバリだが、邦題は・・・？

裁判制度の描き方を含めて、イマイチ納得感が得られないが、映画は勉強！しっかりお勉強を！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■映画は勉強！ドレフュス事件とは？■□■

「歴史を変えた逆転劇 フランス No.1 大ヒット」「あなたが知らない」世紀のスキャンダル「文書改竄 証拠捏造 メディア操作 巨大権力と闘った男の命がけの逆転劇」。本作のチラシには、そんなスキャンダラスな文字が躍っている。そんな、世界が震撼した「衝撃の実話」世紀の国家スキャンダル“ドレフュス事件”を映画化したのが本作だ。

チラシによれば、ドレフュス事件とは、「1894年、フランス。ユダヤ人のドレフュス大尉がドイツのスパイとして終身刑に処せられる。その後、真犯人が現れるが軍部が隠匿。これに対し知識人らが弾劾運動を展開し政治的大事件となった。1899年、ドレフュスは大統領の恩赦により釈放。1906年に無罪が確定した。」と要約されている。

そんな説明を読まなくとも、日本が日清戦争(1894年～95年)を戦っていた時代のフランスは第三共和政の時代。ヨーロッパの近代史は複雑かつ難解だが、普仏戦争の敗北によってドイツにアルザス・ロレーヌ地方の領土を奪われたフランスは、やっとな国力を

取り戻しつつあった。その中枢をなすのは軍部だ。ドイツやフランスの陸軍は富国強兵政策を進める日本陸軍の模範とされたが、当時のフランス陸軍省の中には防諜部があり、諜報活動（スパイ活動）は各国とも盛んだった。日露戦争（1904年～05年）における日本陸軍の明石元二郎大佐のロシアにおける諜報活動は有名だが、なぜフランス陸軍のドレフュスはスパイ容疑で逮捕されたの？ドレフュス事件そのものは有名だが、その内容はまさに“あなたが知らない世紀のスクandal”だ。

本作冒頭は、パリ軍法会議で有罪を宣告されたフランス陸軍大尉アルフレッド・ドレフュス（ルイ・ガレル）が、1895年1月5日、大勢の軍関係者が見守る式典の場で勲章を剥ぎ取られ、軍籍を剥奪されるシーンから始まるが、これはフランスでは相当有名なシーンらしい。2019年の第76回ヴェネチア国際映画祭銀獅子賞を受賞したロマン・ポランスキー監督作品である本作はしっかり鑑賞し、しっかり勉強したいが、まずはそこから勉強を。

■□■原題は？邦題は？物語はピカールの視点から！■□■

本作の原題は、『J'accuse』（私は告発する！）。これは1898年1月13日付新聞「オーロール」紙の一面を飾った、作家エミール・ゾラの公開告発状から取られているようだ。パンフレット15頁にはその全文が載せられているうえ、スクリーン上でもそれが最も効果的なシーンで使われるので、それに注目。そういえば、文豪エミール・ゾラがドレフュス事件に関与していたことは、ドレフュス事件を勉強した時に学んだが……。そんなフランス語の原題に対し、邦題は、『オフィサー・アンド・スパイ』。スパイはもちろんドレフュスのことだが、オフィサーとは？

本作冒頭に見たドレフュスの公開処刑が終わった後、情報局の指揮官ゴンズ將軍（エルヴェ・ピエール）から防諜部長に任命され、異例の若さで中佐に昇進したのがジョルジュ・ピカール（ジャン・デュジャルダン）。彼は陸軍大学で教鞭をとっていた時の教え子だったドレフュスの公開処刑を複雑な思いで見つめていたが、そんなピカールが、アンリ少佐（グレゴリー・ガドゥボワ）を差し置いて、なぜ防諜部のトップについたの？それは明らかにされないが、ピカール中佐とアンリ少佐との確執は明らかだ。しかも、ピカールの執務室がある古めかしい局舎は、あちこちが埃だらけで異臭が漂い、風紀が乱れ切っていたため、改革の必要性を痛感したピカールは、断固それに着手。そして、ドイツ大使館の掃除婦から一通の封緘電報を入手したことをきっかけに、ドレフュスではなく、ルーアンの歩兵連隊に所属するエステラジ少佐がスパイだったのではないかと疑い始めることに……。

ドレフュス事件の映画化を企画したポランスキー監督は、本作をそんなピカールの視点から描いていく。それがどこまでホントに「史実に基づく物語」なのかはわからないが、そんな映画だから、その邦題は『オフィサー・アンド・スパイ』に。なるほど、なるほど。

■□■ピカールによる再調査と真犯人探しの説得力は？■□■

シャーロック・ホームズや金田一耕助の「名探偵モノ」のキモは見事な推理力にあるか

ら、その作品の出来不出来はすべてその推理の説得力にかかるとなる。本作はそんな「探偵モノ」ではないが、ストーリーのキモは、防諜部の改革に乗り出したピカールがドレフュス事件の証拠を再調査（蒸し返し？）する中で、ドレフュスをスパイと認定した決定的証拠とされた“密書”の根拠の不十分さを強く自覚するところから始まる。ピカールの調査によると、“密書”の筆跡とルーアンの歩兵連隊に所属するエステラジー少佐の手紙の筆跡が酷似していたから、アレレ……。ひょっとして、ドレフュスは冤罪で、真犯人（スパイ）はエステラジー少佐？

そう推理したピカールが筆跡鑑定の専門家ベルティヨン（マチュー・アマリック）に依頼すると、その答えは「まったく同じ筆跡だ」というもの。ドレフュス事件の再調査と推理の結果、たどり着いたそんな結論に、ピカール自身もビックリだが、これを直ちに「深刻な問題です。迅速に解決しないと。」と上層部に報告したのは当然。ところが、それに対する上層部の反応は信じがたいもので、国家的なスキャンダルを恐れるゴンス将軍は「正気か？エリートの子がなぜユダヤ人をかばうんだ。黙っていろよばわからん。」とあからさまに隠蔽を正当化。陸軍大臣からも「エステラジーを身代わりにするつもりか？そうはさせん。」と叱責されたから、アレレ。さあ、ピカールはどうするの？そして、ドレフュス事件の後始末（再審？）はどうなるの？さらに、真犯人（？）エステラジーの逮捕の有無は？

■□■ 『キネマ旬報』の評価は真っ二つ！なぜこんなに不評？■□■

本作はヴェネチア国際映画祭銀獅子賞受賞作であるうえ、『戦場のピアニスト』（02年）（『シネマ2』64頁）でカンヌ国際映画祭のパルムドール賞と米アカデミー賞監督賞を受賞したロマン・ポランスキー監督の最新作だから、新聞紙評の評価は押しなべて高い。にもかかわらず、『キネマ旬報』6月下旬号の「REVIEW 日本映画&外国映画」で、上島晴彦氏は星4つを付けているものの、宮崎大祐氏は星2つ。児玉美月氏に至っては、「映画を批評の俎上に載せる以前に、未成年への性暴行で米裁判所から有罪判決を受けて国外脱出した上に複数人からの告発が公になっている映画監督が、内容自体それを観客に想起させることを免れないような題材で確信犯的に撮る露悪趣味加減にはなから全くついていけない。この自己言及的な新作は自身のドキュメンタリー映画『ロマン・ポランスキー 初めての告白』から、この映画監督が歯切れの悪い言い訳を繰り返しているようにしか思えない印象をさらに助長させたに過ぎなかった。」とボロクソで、星なしとしているから、アレレ……。こんなに不評なのは一体なぜ？

ロマン・ポランスキー監督の有罪判決を受けた未成年者に対する性暴力事件問題とユダヤ人としての出自をどう考えるかは彼のプライベートな問題だから、それを本作の出来不出来と結びつけることに私は反対。したがって、上記の児玉氏の意見には同調できないが、ピカールの視点からドレフュス事件を再調査するという筋でまとめられた本作は、さあ、これからどう展開していくの？ピカールはゴンス将軍から防諜部長に任命されたが、その任務は決してドレフュス事件の再調査ではなかったはず。対独諜報活動という本来の任務

に忙しいはずなのに、ピカールは一体何のために何をやってるの？そこらがイマイチわからないため、本作の説得力はイマイチ。

■□■この男の行動原理は一体ナニ？それが大ポイントだが■□■

私は司馬遼太郎の長編小説『坂の上の雲』が大好き。後半のハイライトになる日露戦争の描写は、遼陽会戦、奉天会戦等の陸軍の戦いも面白いが、なんと言っても日本海海戦でバルチック艦隊を殲滅させるサマは何度読んでも大興奮！それと同時に、私が同作に興味を持つのは、私と同じ松山市出身の秋山好古・真之兄弟の“人となり”だ。秋山真之の友人、正岡子規は俳人として名を成したが、なぜ秋山兄弟は軍人を志したの？本作冒頭のドレフュス公開処刑のシーンと、彼の教官だったピカールが防諜部長に就任した後、なぜかドレフュス事件の再調査に情熱を注ぐ姿を見ていると、彼の行動形態は秋山兄弟とは違うものの、軍人としては一種の共通項も・・・？

それはともかく、本作中盤の見どころは、上層部からの“圧力”にもかかわらず、いや圧力が増大すればするほど、逆にピカールの真相解明への情熱が増していく姿だ。それは自身のキャリアの犠牲のみならず、軍人生命の危機すら伴うものだが、なぜ彼はそこまでやるの？本作中盤に見るエミール・ゾラ（アンドレ・マルコン）との接触等の“ドラマ”は、まさに「文書改竄 証拠捏造 メディア操作 巨大権力と闘った男の命がけの逆転劇」だ。

そんなピカールは、根っからの正義漢！反権力の男！いやいや、一方でそんな大活躍を続けるピカールが、外務大臣モニエの妻であるポーリーヌ（エマニュエル・セニエ）との不倫関係を堂々と続けている姿を見ていると、そうとも思えない。しかも、本作ラストにはピカールが軍人として、あっと驚く大出世するシークエンスが登場する（これも「Based on a true story」）から、ビックリ！そもそも、この男の行動原理は一体ナニ？それが大ポイントだが・・・。

■□■フランスの裁判制度は？それが最後まで？？？■□■

弁護士歴50年に近い私は、各国の裁判制度についてもそれなりの知識を持っているつもりだが、ドレフュス事件とその再審、それに関連するピカールの裁判や、真犯人だとされたエステラジー少佐の裁判については、その結果は教えられるものの、その裁判手続がどのように進められたのかはサッパリわからない。さらに、ドレフュス裁判は当然、一般の刑事事件ではなく、軍事法廷（軍法会議）だから、さらにそのシステムがわからない。ちなみに、『日本共産党闘争小史』を読むと、日本共産党員の市川正一は治安維持法違反で被告人とされたわけだが、その詳細な裁判記録が残っているから、それを読めば裁判の実態がよくわかる。他方、「2.26事件」で決起した青年将校たちは、一般の刑事事件とは違う軍事法廷（軍法会議）で処断され、有罪、死刑、そして即執行されたはずだ。

それと同じように、冒頭の公開処刑で勲章を剥ぎ取られ、軍籍を剥奪されたドレフュスは、スティーブ・マックイーンとダスティン・ホフマンが共演した名作『パピヨン』（73

年)、それをリメイクした『パピヨン』(17年)、『シネマ45』127頁)で有名な仏領ギニア沖に浮かぶ悪魔島の監獄に収監されたが、スクリーン上で見る限りそこは意外に快適そう・・・?いや、そんなことはないだろうが、明らかに上層部の命令に違反していつまでもドレフュス事件を蒸し返している(?)ピカールは、いつまでその活動が続けられるの?彼が逮捕され、起訴されるのは時間の問題だろうが、その裁判はどんなふうに審理され、有罪となれば、その刑はどんなふうに執行されるの?

本作は131分の力作だが、そこらあたりが経験豊富な弁護士の私ですら最後までサッパリわからない。チラシに躍っている「文書改竄 証拠捏造 メディア操作 巨大権力と闘った男の命がけの逆転劇」を売り文句にする以上、そこらあたりはもう少しわかりやすく丁寧な説明が必要だったのでは?

2022(令和4)年6月11日記